

「新臨床外科学」第4版

武藤徹一郎・幕内 雅敏 監修
川崎 誠治・佐野 俊二・名川 弘一 編集
野口眞三郎・平田 公一 編集協力
渡邊 聡明 編集協力

長崎大学教授・消化器外科

兼 松 隆 之

外科教科書のスタンダードとして、定評のある「新臨床外科学」が、このたび第4版として上梓された。この衣替えでさらに魅力的な特徴を打ち出している。

「新臨床外科学」の初版は医学部の5・6年生や研修医などを対象とした教科書としてスタートした。そのため医師国家試験対策や臨床研修の中でも、外科に必要な基本的な知識を得るのに十分な配慮のもとに編纂されてきたが、第4版でもその方針に揺るぎはない。そのうえでページ数を増加させ、“外科専門医”を目指す者のスタンダードテキストとしても使えるように、内容が高度化されたのが大きな特徴である。

医学生諸氏にとっては、最近では与えられる知識より、自らが調べ、学ぶ教育へとシフトしている。それに対応するためには、教科書に掲載されている内容にはそれなりの深み

も求められる。今回の改訂版でも、「基礎的知識」の項には十分なスペースを割いている。また、外科治療についても単に手法を述べるにとどまらず、治療成績も最新のものが図示されていることなど、卒前の医学教育においても使いやすく、また重厚さも併せ持った座右の書となった。

いまや、医学教育には画像診断や病理所見等を理解することは必須である。医師国家試験でもそれらの知識と理解力を求める問題も少なくない。幸い、本書には、典型的なX線、エコー、MRI、内視鏡写真から病理の肉眼・顕微鏡写真などが豊富に掲載されていることも大きな特徴である。しかも、第4版でのカラー写真の鮮明さはまさに特筆ものである。

内容が豊富な教科書であるから、知りたい項目にはすべて目を通してもらいたいところではあるが、現実

には多忙を極める日常の中、それがままならぬこともある。本書の特徴のもう一つは、特に重要な箇所には下線が引いてあって、読者に注意を喚起している点である。細やかな配慮がうれしい。

元来、教科書の執筆者は教育に携わる機会の多い大学関係者で占められがちであるが、本書では執筆者の約20%は大学以外に勤務する専門医である。いまや臨床教育は大学だけでは偏りがあり、関連教育病院との協力が必要であることは広く認められているところである。本書は臨床実地の教育の観点からも、非常に考え抜かれた専門医によって構成された執筆陣である。

● B5 頁1304 2006 定価24,150円
(本体23,000円+税5%)

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)